兵庫県豊岡市における新発見の遺跡の位置づけ

仲田　周平（豊岡市文化財室）

豊岡市日高町久斗・岩中地域において確認された大ナル１～３号墳および蝶字谷１～17号墳は、神鍋高原より円山川へと流れる稲葉川の南、標高約240ｍを頂部として北北東方向と北東方向の２方向に延びる尾根上に位置する。

このうち、大ナル１～３号墳は北北東方向の尾根上に位置する。なお、この尾根の先には稲葉川が流れ、その対岸には、古墳時代の集落跡である南構遺跡群が立地することから、関連性が想定される。ただし、南構遺跡群と大ナル古墳群との間に古墳はなく、直線距離で1.5㎞離れ、180mの比高差がある。また、遺跡群内では11基の石室墳が確認され、なおかつ遺跡群北側の丘陵部では大ナル古墳群より近い位置に多くの古墳が確認されているため、関連性を結びつけるには疑問点がある。豊岡市内では、日高町久田谷に所在する大谷古墳群は平野部より直線距離で約２㎞、比高差約200mの高所に立地している。古墳の築造場所が必ずしも集落跡や平野部、河川等交通の要衝と結びつかないことを示す可能性も考えられる。

対して蝶子谷１～17号墳は、前述した大ナル１～３号墳とは別の北東方向にのびる尾根上に位置し、東側には円山川と稲葉川の合流地点および両河川が形成した平野部を望む。平野部において集落跡は確認されていないが、南東の山裾部には上森１～９号墳、大谷１～28号墳が所在することから関係性が考えられる。また、尾根と山裾との間は距離があるものの、急峻な斜面となっていることから、古墳の造営には不向きであったとみられる。

豊岡市但東町小坂で確認された大光寺跡は、「大高寺」として南北朝期の文書に現れる中世寺院である。大光寺という字名が残ることから、一部の研究者により位置および規模について指摘されていた。[(1)] しかしながら、大規模な寺院跡ではなく山奥に立地することから、遺構の詳細は不明であった。南北朝期の但馬は数年おきに守護が入れ替わるなど複雑な様相を呈する時代である。当地域の中世史を理解する上でも重要な成果である。

（１）宿南保 2002『城跡と史料で語る　但馬の中世史』神戸新聞総合出版センターほか西尾孝昌氏の教示による